



新聞の新聞

其の五

福島縣立某高等女學校の教諭二名平町のMカフェに於て甚だしく亂醉し。常人も口にせざる淫猥極る卑談を高らかに放言し著しく來客に不快を與へたものだ。

唯それだけならば我慢もなるが。鬼踊りを演じて僕の酒徳利をコンクリートの土間に叩き落して置いて已れの過失をよそに『俺のズボンに酒をブツかけたのは君だなあ』など喰つてかかつて來たので記者はそれとなく忠告してやれば。暴言慢罵の口を衝き。揚々として引揚げて行つた。記者は。右不良教諭の氏名も心得てゐるが本人達の爲特にその名を記さぬことにする。以後充分の謹慎を望む。

東京朝日平通信部の淺野惠四郎君。今回嚴父を喪ひ。社を勇退して亡父の業たる自動車會社の社長となつた由。

平町田町松のヌシの主人公。もつと判り易く言へば。社民黨磐城支部の松本清之丞君。近々中磐城地方の政治經濟に主眼を置く處の月刊雑誌を發行する豫定なりと。吾々は一刻も早くその實現を望み松本君の健闘を祈るものである。

平町の文雄。山田綠雨君は過般來より君の作往文獻を蒐録したる。綠雨小集。を記念出版することになつてゐたが。年内か。翌春早々その發兌を見ることに至るさうだ。更に全君は。目下長篇小説の筆を起すさうだ。全君の言葉を藉りて言へば。一九三一年度一杯を費しても。心身の全エネルギーを傾注し。畢生の力作たることを期する由にて。その題名は『生活戦線異常あるなし』なさうであるごちらかと言へば遅筆で。推敲再推敲の文責觀念を持つ全君のことだからそれは力作たることに疑ひはないものと想察する。

時期到來と許り。一切の新聞記者が年賀廣告に足も摺木になれといふ。苦闘を續けてゐるようだが。その収益率は昨年に比較して半減に滿たぬようだ。廣告主の側では年賀外交の猛襲を喰つて逃げを打ち。居留守をつかひ。千變萬化の戰術で。その面接を回避してゐるものが多い。座敷の屏風越しに主人公の頭が見へても番頭は『一寸外へ出ました』なんて。見え透へたウソを吐く處があると思ふと當の主人自身が『主人は生憎不在です』などとホザク處もあるようだが吾々は。廣告が出せぬなら出せぬでよい快く面接して呉れた上で。諸否の返答が得たいものだ。不景氣は人を絞るくして嘘を吐かしめるわけだ。

年内も餘す處餘日がないこれが1930年度發行の最終號である顧みると感慨無量のものがある。

とんだ農林省の技師  
左翼農民組合の組織を力説

去る十貳日正午本郡鹿島支部が組織されるであらう村に農林省の技師が赴行しと云はれてゐる。

鈴木昌雄君

家族救済援助芳名

菊地寅治 郎殿  
高階一 郎殿  
直井藤太 郎殿  
鈴木重 助殿  
吉田喜代 治殿  
大久保貞之助殿

大和田印刷所

平南町 電話四六番

▲健康増進病後の回復等  
(一) まむしのエキス 三圓  
(二) スツボンエキス 二圓  
(三) 養命酒 四圓  
(四) 諸毒下しの妙藥 二圓  
(五) 安流丸 二圓  
(六) 神効散 二圓  
以上優良品として御勧め致します  
平町五丁目角  
總代理店 山野邊藥局  
▲藥事衛生の御相談は是非弊藥局へ

高久病院

平町田町 電話五二三番  
内科 小兒科 外科 皮膚泌尿科  
耳鼻咽喉科 外科花柳病科  
新湯醫學士 赤高 久  
雄清忠

酒類味 噌醬油 綠川酒店  
平町材木町 電話四六八番

藤沼醫院  
平町 電話五〇七番  
内科 小兒科 花柳病科  
皮膚泌尿科 耳鼻咽喉科  
物理學的診療科  
本院主事 難波睦  
賀澤忠治  
平町電六四二番

磐城共病院

魚清  
電話平 633番

松村醫院  
平南町 電話七〇一  
専門 皮膚病 婦人病 淋病 腸十二指腸病  
内科 専門

三井吳服店  
電話三八四番

てがる食堂  
田町通り 大谷菊次郎  
御飯物うどん 各五錢より  
やすくてうまいものが食べられる  
簡易 食事

山光堂  
福島縣平町四丁目 電話五五〇番  
自動自轉車 自轉車  
附屬品 葬具一式販賣

高木調髮所  
高木貞雄

釜屋商店  
平町五丁目 電話九番 九九番

和洋銅鐵金物問屋